



Japanese Society for Bacteriology

第 91 回 日本細菌学会関東支部総会

講演抄録集

期 日：平成20年 **10月23日** 木・**24日** 金

会 場：生命の森リゾート

日本エアロビクスセンター

総会長：山本 友子（千葉大学大学院薬学研究院）

第91回
日本細菌学会関東支部総会
講演抄録集

総会長：山本友子（千葉大学 大学院薬学研究院 微生物薬品化学研究室）

期 日：平成20年10月23日（木）～24日（金）

会 場：生命の森リゾート 日本エアロビクスセンター
〒297-0201 千葉県長生郡長柄町上野521-4
電話 0475-35-3333

PROGRAM

- 評議委員会：10月23日（木） 11：15～12：15
生命の森リゾート フォレストアカデミー 3階302号室
- 会務総会：10月23日（木）12：20～12：50
生命の森リゾート フォレストアカデミー 3階301号室
- 情報交換会：10月23日（木）19：00～21：00
生命の森リゾート トリニティ書齋内レストラントリニティ

参加者へのご案内

- 参加費：2,000円（学生は無料です。）
 抄録集：1,000円（抄録のみ希望の場合）
 情報交換会費：2,000円

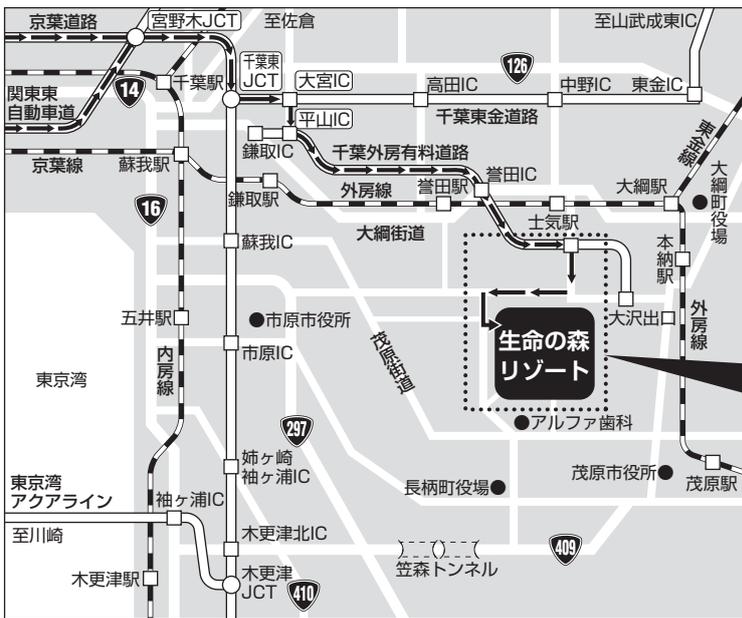
講演者へのご案内

- 発表は会場に用意してあるパソコン（Win/Mac）で行います。発表30分前までには会場入り口のスライド受付にメディア（CD-Rまたはフラッシュメモリー）をお持ちください。尚、使用できるソフトはMicrosoft Power Pointのみです。
- プロジェクターは1台用意してあります。
- 一般演題はすべて口頭発表です。発表時間は10分、討論3分の計13分です。討論を十分に行うため、発表時間は厳守をお願いいたします。
 ※最終演題終了後に Best Presentation 賞を2演題に送る予定です。

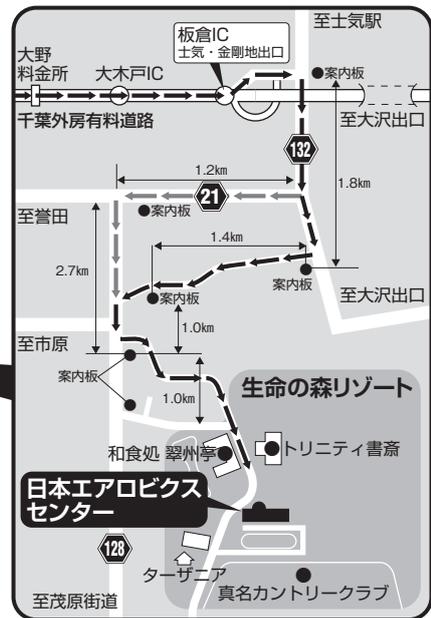
交通のご案内

生命の森リゾート 日本エアロビクスセンター：千葉県長生郡長柄町上野 521-4

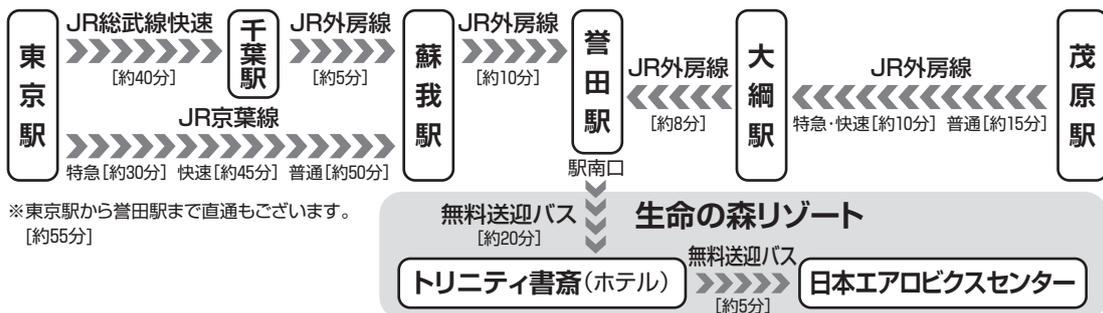
■アクセスマップ



■現地付近拡大図



■電車ご利用の場合……JR外房線「誉田駅」より無料送迎バスで約20分 日本エアロビクスセンター前下車



10月23日 困

11:00	11:15~12:15 評議員会
12:00	12:20~12:50 会務総会
13:00	12:50~12:55 会長挨拶 会長：山本 友子 千葉大学大学院薬学研究院
13:00	12:55~13:47 一般演題 1 化学療法・薬剤耐性 座長：荒川 宣親 国立感染症研究所 細菌第二部
14:00	13:47~14:26 一般演題 2 真菌 1 座長：川本 進 千葉大学 真菌医学研究センター
14:00	14:26~15:05 一般演題 3 真菌 2 座長：新見 昌一 国立感染症研究所 生物活性物質部
15:00	休憩
15:00	15:20~15:59 一般演題 4 グラム陽性菌遺伝 座長：関崎 勉 東京大学 農学生命科学研究科
16:00	15:59~16:25 一般演題 5 病態形成 座長：神谷 茂 杏林大学医学部感染症学研究室
16:00	16:25~17:04 一般演題 6 細菌病原性 1 座長：伊豫田 淳 国立感染症研究所 細菌第一部
17:00	休憩
17:00	17:20~18:20 特別講演 1 Intracellular activities of <i>Salmonella</i> 演者：David Holden Imperial College London 座長：山本 友子
18:00	
19:00	19:00~21:00 情報交換会
20:00	
21:00	

10月24日 金

9:00	8:50~9:29 一般演題 7 腸内細菌叢 座長：水之江義充 東京慈恵会医科大学 細菌学講座
9:00	9:29~10:08 一般演題 8 う蝕・歯周病菌 座長：石原 和幸 東京歯科大学 微生物学講座
10:00	10:08~10:47 一般演題 9 グラム陰性菌生理・遺伝 座長：天野富美夫 大阪薬科大学 生体防御学研究室
10:00	休憩
11:00	11:00~11:50 特別講演 2 細胞内自己消化システム・オートファジーによる生体防御 演者：吉森 保 大阪大学 微生物研究所 座長：渡邊 治雄 国立感染症研究所
12:00	昼食
13:00	13:00~13:39 一般演題 10 腸管出血性大腸菌 座長：川岸 郁朗 法政大学生命機能学科
13:00	13:39~14:18 一般演題 11 細菌病原性 2 座長：切替 照雄 国立国際医療センター研究所 感染症制御研究部
14:00	14:18~14:57 一般演題 12 細菌病原性 3 座長：阿部 章夫 北里大学 感染制御科学科
15:00	15:05~15:30 Best Presentation 賞授与 閉会の辞 会長：山本友子
16:00	

一般演題1

[化学療法・薬剤耐性] (12:55～13:47) 座長：荒川 宣親(国立感染症研究所 細菌第二部)

01 新規キノロン系抗菌薬 DC-159a の *in vitro* 主薬理特性： キノロン耐性菌に対する活性と耐性菌出現抑制について

○奥村 亮^{1,2)}、井上 和恵¹⁾、小野寺宜郷¹⁾、星野 一樹¹⁾、大谷 剛¹⁾、
山本 友子²⁾

1) 第一三共・生物医学第四研究所、2) 千葉大・院薬・微生物薬品化学

02 臨床分離肺炎球菌のケトライド耐性機構

○北川奈緒美¹⁾、高屋 明子¹⁾、横山 栄二^{1,2)}、山本 友子¹⁾

1) 千葉大・院薬・微生物薬品化学、2) 千葉衛研・細菌

03 カルバペネムによって選択されたカルバペネム耐性緑膿菌の耐性機構

○谷本 弘一¹⁾、富田 治芳²⁾、藤本 修平²⁾、池 康嘉^{1,2)}

1) 群馬大学大学院医学系研究科附属薬剤耐性菌実験施設、2) 同 細菌学

04 *Helicobacter pylori* バイオフィルム形成がおよぼすクラリスロマイシン耐性への影響

○米澤 英雄、大崎 敬子、蔵田 訓、花輪 智子、神谷 茂

杏林大・医・感染症

一般演題2

[真菌1] (13:47～14:26) 座長：川本 進(千葉大学 真菌医学研究センター)

05 薬剤排出ポンプ阻害剤による真菌 ABC 輸送体の感受性化

○新見 昌一¹⁾、田辺 公一¹⁾、新見 京子²⁾、Erwin Lamping²⁾、高野 幸枝¹⁾、
Ann R. Holmes²⁾、Brian C. Monk²⁾、Richard D. Cannon²⁾

1) 国立感染症研究所生物活性物質部 2) オタゴ大学歯学部口腔科学講座

06 病原性真菌 *Candida glabrata* を用いた細胞壁合成遺伝子の網羅的機能解析

○三谷 宏樹、上野 圭吾、三上 襄、知花 博治

千葉大学真菌医学研究センター 高分子活性分野

07 Multilocus microsatellite sequence による 病原性酵母 *Cryptococcus neoformans* 多型性の世界分布解析

○五ノ井 透¹⁾、Ahmed Hanafy¹⁾、Wieland Meyer²⁾、三上 襄¹⁾

1) 千葉大・真菌医学研究センター、2) Molecular Mycology Res, Ctr. Univ. Sidney

一般演題3

[真菌2] (14:26～15:05)

座長：新見 昌一(国立感染症研究所 生物活性物質部)

08 病原性酵母 *Cryptococcus neoformans* の莢膜の厚さが性状および病原性に与える影響

- 大楠美佐子、大畑美穂子、清水 公德、川本 進
千葉大学真菌医学研究センター

09 病原性酵母 *Cryptococcus neoformans* は二成分シグナル伝達系を介して外部環境を感知する

- 清水 公德¹⁾、李 皓曼¹⁾、吉見 啓²⁾、田中 千尋³⁾、阿部 敬悦²⁾、渡辺 哲¹⁾、亀井 克彦¹⁾、山口 正視¹⁾、川本 進¹⁾
1) 千葉大学真菌医学研究センター、2) 東北大学未来科学技術共同研究センター、
3) 京都大学農学研究科

10 *Cryptococcus neoformans* の G1 サイクリン CnCln1 に関する構造機能解析

- ヴァルトウダズ・エリック¹⁾、大楠美佐子¹⁾、大畑美穂子¹⁾、ミクロス・イダ²⁾、スピツキ・マティアス²⁾、竹尾 漢治¹⁾、川本 進¹⁾
1) 千葉大学真菌医学研究センター、2) Department of Genetics, University of Debrecen

一般演題4

[グラム陽性菌遺伝] (15:20～15:59)

座長：関崎 勉(東京大学 農学生命科学研究科 食の安全センター)

11 *Streptococcus dysgalactiae* subsp. *equisimilis* GGS_124 株のゲノム解析

- 下村 有美、奥村 香世、花崎 真一、島田 恭兵、切替 照雄、秋山 徹
国立国際医療センター研究所 感染症制御研究部

12 *Streptococcus suis* の *ofs* 遺伝子の多様性と人および豚由来株内での遺伝子の分布状況

- 高松 大輔¹⁾、大崎 慎人¹⁾、高井 伸二²⁾、関崎 勉³⁾
1) (独) 農研機構・動衛研・細菌寄生虫病、2) 北里大学・獣医学部、
3) 東京大院・農・食の安全研究センター

13 *Streptococcus suis* の線毛関連遺伝子群の分布及び *srtG* 遺伝子群の線毛形成に関する解析

- 大倉 正稔¹⁾、大崎 慎人¹⁾、関崎 勉²⁾、高井 伸二³⁾、高松 大輔¹⁾
1) (独) 農研機構・動衛研・細菌寄生虫病、2) 東京大院・農・食の安全研究センター、
3) 北里大・獣医

特別講演

Intracellular activities of *Salmonella*

David Holden Imperial College London

Following entry of *Salmonella* into host cells, this pathogen remains in a membrane-bound compartment called the *Salmonella*-containing vacuole (SCV). Bacteria sense the vacuolar environment and activate the expression of the SPI-2 type III secretion system (T3SS), which translocates several effector proteins across the vacuolar membrane.

The SPI-2 T3SS has been implicated in several physiological activities, including avoidance of killing by macrophages, bacterial replication in a variety of host cell types, interference with immune signalling and the induction of cytotoxicity. We have developed a new method that allows precise measurement of bacterial intracellular replication and have used this to investigate the contribution of SPI-2 and host resistance mechanisms to bacterial replication in macrophages.

We have undertaken biochemical studies of individual SPI-2 effector proteins and found that SseL is a deubiquitinase, SteC is a kinase, SpvC is a phosphothreonine lyase and SseJ is a eukaryotic activator-dependent glycerophospholipid: cholesterol acyltransferase. The physiological effects of these activities are currently under investigation.

Two other effectors, SseF and SseG, retain SCVs at the microtubule organizing centre/Golgi region in epithelial cells, where bacterial replication takes place. To investigate host proteins that contribute to this process, a targeted RNA interference (RNAi) approach was used to knock down expression of approximately 200 human proteins that are related to Golgi function. Several proteins were identified that are required to retain SCVs at the MTOC : the screen also revealed a novel tubular network derived from the Golgi. This network is dependent on the activities of SPI-2 effectors and shows that, in addition to well-studied interactions with late endosomal compartments, *Salmonella* also interacts specifically with post-Golgi trafficking.

細胞内自己消化システム・オートファジーによる生体防御

吉森 保 大阪大学・微生物病研究所

ギリシャ語で「自分を食べる」という意のオートファジー Autophagy は、自己成分の分解・再利用を行うために全真核細胞が備える細胞内大規模分解システムである。オートファゴソームと呼ばれる膜構造が、細胞質やオルガネラの一部を囲い込み、そこに消化酵素を内蔵するリソソームが融合し消化が起こる。日常的には細胞構成成分の代謝回転(細胞の新陳代謝)に貢献する一方、飢餓時に亢進しサバイバルに必要な栄養源確保に働く。近年には、発生・分化、プログラム細胞死、抗原提示などにも関わる事が明らかになってきており、極めて重要な細胞機能として注目されている。

オートファジーの存在は古くから知られていたものの、その分子基盤は永らく不明であった。しかし我が国における酵母を用いた研究がブレイクスルーとなり、近年急速に解明が進みつつある。オートファジーの研究分野は、日本が世界をリードしている。我々は、酵母のオートファジー関連遺伝子群 *ATG* の哺乳類ホモログの解析からオートファジーの分子機構の一部を明らかにし、その一翼を担ってきた。我々が同定したオートファゴソーム結合タンパク質 LC3 は知られている唯一のマーカーとして世界中で用いられている。

我々は、同定した分子を手がかりにオートファジーの生理的意義の研究にも着手し、細胞に侵入した病原性細菌の排除というオートファジーの新しい役割を発見した。すなわち、非貪食細胞に侵入した A 群レンサ球菌をオートファゴソームが捕獲し死滅させていた。本来細胞内代謝に関わるオートファジーが、一種の自然免疫として機能している点が興味深い。我々はまた、細胞内に蓄積・凝集し神経変性疾患等を引き起こす異常タンパク質の分解にもオートファジーが働くことを示した。進化の過程で、細胞にとっての「招かれざる客」を排除し生体防御に働くオートファジーが現れてきたものと思われる。

参考文献

- 1) Nakagawa I, et al. Autophagy defends cells against invading group A *Streptococcus*. *Science* 306, 1037 – 1040 (2004)
- 2) Kamimoto T, et al. Intracellular inclusions containing mutant $\alpha 1$ -antitrypsin Z are propagated in the absence of autophagic activity. *J. Biol. Chem.* 281, 4467 – 76 (2006)
- 3) Fujita N, et al. The Atg16L complex specifies the site of LC3 lipidation for membrane biogenesis in autophagy. *Mol Biol Cell.* 19, 2092 – 2100 (2008)

10月23日^木

【第1日目】

一般演題

1～18

新規キノロン系抗菌薬 DC-159a の *in vitro* 主薬理特性： キノロン耐性菌に対する活性と耐性菌出現抑制について

○奥村 亮^{1,2)}、井上 和恵¹⁾、小野寺宜郷¹⁾、星野 一樹¹⁾、大谷 剛¹⁾、
山本 友子²⁾

1) 第一三共・生物医学第四研究所、2) 千葉大・院薬・微生物薬品化学

In Vitro Antibacterial Property of Novel Quinolone, DC-159a: Potent Activity against Quinolone Resistant Strains and Potential to Minimize the Development of Quinolone Resistance

○Ryo Okumura^{1,2)}, Kazue Inoue¹⁾, Yoshikuni Onodera¹⁾, Kazuki Hoshino¹⁾,
Tsuyoshi Otani¹⁾, Tomoko Yamamoto²⁾

1) Biological Research Laboratories IV, Daiichi Sankyo Co., Ltd.

2) Department of Microbiology and Molecular Genetics, Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Chiba University

【目的】 近年、市中感染症起炎菌におけるキノロン耐性菌の出現とその増加が危惧されている。次世代レスピラトリーキノロン薬が具備すべき主薬理特性は、市中呼吸器感染症起炎菌として最も重要な肺炎球菌、特に既存キノロン薬耐性肺炎球菌に対する高い抗菌活性および低い耐性獲得性を兼ね備えることにある。我々は、3-aminopyrrolidyl キノロン誘導体に抗菌活性および耐性獲得性において優れた特性を見出し、報告してきた。今回、新規3-aminopyrrolidyl キノロン誘導体である DC-159a について、肺炎球菌を中心に、本剤のキノロン耐性菌に対する抗菌活性、標的酵素阻害活性、耐性菌出現頻度、MPC (Mutant Prevention Concentration) および短時間殺菌力を検討し、そのレスピラトリーキノロン薬としての資質について考察した。

【方法】 抗菌活性の測定は国内外の新鮮臨床分離株および肺炎球菌キノロン耐性変異株を用い、CLSI法に準じて実施した。標的酵素阻害活性の測定は野生型 DNA gyrase および Topoisomerase IV (TopoIV) を用いたセルフリーの酵素試験系にて実施し、酵素活性を50%阻害する濃度 (IC₅₀) を算出した。耐性菌出現頻度・MPC の測定は寒天培地を用い、35℃、48～72 時間培養後に薬剤含有培地上に出現したコロニー数を基に算出した。短時間殺菌力は液体培地を用いた *in vitro* 殺菌曲線を作成し検討した。

【結果】 キノロン耐性肺炎球菌 (n = 51) に対する DC-159a の MIC₉₀ は 1 μg/ml であり、LVFX (同 32 μg/ml)、moxifloxacin (MFLX, 同 4 μg/ml) を上回る高活性を示した。肺炎球菌野生型 DNA gyrase および TopoIV に対する DC-159a の阻害活性 (IC₅₀) はそれぞれ 13.3 μg/ml、6.78 μg/ml で、sitafloxacin (STFX) に次いで高活性であり、LVFX、MFLX を凌駕した。さらに、DNA gyrase および TopoIV に対する DC-159a の阻害活性比 : 1.97 は、他剤に比較して小さかった。DC-159a の耐性菌出現頻度および MPC は STFX に次いで低値であり、高い耐性菌出現抑止効果を示した。肺炎球菌に対する DC-159a の短時間殺菌力は他キノロン薬に比べ非常に強力であった。

【結論】 DC-159a の肺炎球菌 (キノロン耐性菌を含む) に対する高い抗菌活性ならびに低い耐性獲得性は標的酵素を強力かつバランスよく阻害する特性と、強力な短時間殺菌力に起因する可能性が考えられた。

臨床分離肺炎球菌のケトライド耐性機構

○北川奈緒美¹⁾、高屋 明子¹⁾、横山 栄二^{1,2)}、山本 友子¹⁾

1) 千葉大・院薬・微生物薬品化学、2) 千葉衛研・細菌

The mechanism of resistance to Ketolide in *Streptococcus pneumoniae*○Naomi Kitagawa¹⁾, Akiko Takaya¹⁾, Eiji Yokoyama^{1,2)}, Tomoko Yamamoto¹⁾

1) Department of Microbiology and Molecular Genetics, Chiba University, Chiba

2) Division of Bacteriology, Chiba Prefectural Institute of Public Health, Chiba

肺炎球菌 *Streptococcus pneumoniae* は肺炎と中耳炎の主要な原因菌であり、髄膜炎や菌血症、敗血症などを惹き起こすこともある。肺炎球菌感染症には、エリスロマイシン EM などのマクロライド系抗菌薬が繁用されているが、近年マクロライド耐性肺炎球菌が増加している。この薬剤耐性菌に対する有効策として、ケトライド系抗菌薬のテリスロマイシン TEL が開発されたが、既に海外では TEL 低感受性肺炎球菌の増加と高度耐性菌が報告され、国内においても TEL 低感受性菌が臨床より分離され始めている。このような背景をもとに、今回は肺炎球菌のマクロライド・ケトライドに対する耐性化の現況を明らかにし、耐性機構の検討を行った。2005～2006年に国内の医療機関より分離された肺炎球菌 120株について、EM に対する MIC を測定したところ、約 80% が EM 耐性を示し、35% が高度耐性菌であった。TEL に対する MIC を測定したところ、3株が 0.5～1 μ g/ml (感受性菌 MIC < 0.03 μ g/ml) であり、低感受性を示した。パルスフィールドゲル電気泳動により 3株は独立したクローンであることを確認した。TEL 低感受性化の要因としては、薬剤結合部位である 23SrRNA ドメイン II の変異や *mef* や *erm* などの外来性耐性遺伝子が知られているが、それらがどの程度 TEL 低感受性化に寄与しているかは明らかにされていない。そこで、3株の TEL 低感受性株について、まず 23SrRNA の変異の有無について検討した。その結果、ドメイン I および II にいくつかの変異が検出されたものの、TEL 結合部位のドメイン II 725 位付近は野生株と同様の配列であった。又 EM 結合部位のドメイン V にも変異は検出されなかった。次に外来性耐性遺伝子 *ermA*, *ermB*, *ereA*, *ereB*, *mefA*, *mefE*, *mphA* の有無について検討した。その結果、*mefE* と *ermB* が検出された。そこで、TEL 低感受性化における *mefE* 及び *ermB* の寄与を検討するため、まず *mefE* 欠損株を構築し、MIC を測定した。その結果、*mefE* 欠損株の MIC は一段階の低下にとどまった。さらに、*ermB* 欠損株を構築し、MIC を測定した。その結果、*ermB* 欠損株の MIC は二段階低下したが、感受性株レベルまでは低下しなかった。現在 2重欠損株を構築し、両因子の TEL 感受性低下への寄与を検討中である。

会務関係資料

関東支部総（例）会

評議員名簿

日本細菌学会関東支部総(例)会

支部長	回	年	月日	総(例)会長	会 場
寺田 正中	0	昭和22	11.16～17	寺田 正中(慈大)	東大 医
	1	23	11.14～15	寺田 正中(慈大)	東大 医
	2	24	11.13～14	寺田 正中(慈大)	北里講堂
	3	25	11.12～13	長谷川秀治(伝研)	伝研
	4	26	6.22～23	滝田 順吾(北里研)	北里講堂
	5		11.15～16	滝田 順吾(北里研)	北里講堂
	例1	27	2.23	寺田 正中(慈大)	慈大
	6		6.20～21	小林 六造(予研)	公衛院
例2		9.13	緒方 富雄(東大 医)	東大 医	
	7		11.14～15	小林 六造(予研)	公衛院
秋葉朝一郎	例3	昭和28	6.27	中村 敬三(日医大)	日医大
	例4		9.19	清水 文彦(東医歯大)	東医歯大
	8		11.6～7	秋葉朝一郎(東大 医)	東大 医
	例5	29	6.18	小林 正芳(家畜衛試)	家畜衛試
	例6		9.25	土屋 毅(順大 医)	順大 医
	9		11.13～14	清水 文彦(東京歯大)	東京歯大
	例7	30	6.18	矢追 秀武(横浜市医大)	横浜市医大
	例8		9.24	平野 憲正(東京女子医大)	東京女子医大
	10		11.18～19	牛場 大蔵(慶大 医)	北里講堂
	滝田 順吾	例9	昭和31	6.23	米沢 和一(東京歯大)
11			11.16～18	小島 三郎(予研)	公衛院
代行	例10	32	6.29	田崎 忠勝(信大 医)	信大 文理
沼田 岳二	12		11.15～16	大黒 勇(東医大)	新宿文化会館
	例11	33	7.4～5	三橋 進(群馬大 医)	伊香保会館
	13		11.14～15	白土 寿一(日大 歯)	日大 歯
牛馬 大蔵	例12	昭和34	5.29～30	越後貫 博(千葉血清研)	千葉血清研
	例13		4.27～28	児玉 威(神奈川衛研)	神奈川勤労会館
	14	35	11.13～14	後藤 正勝(東大 医)	東大 医
	15		11.11～12	工藤正四郎(伝研)	公衛院
	例14	36	6.23～24	相磯 和嘉(千葉大腐研)	千葉大 医
	16		11.10～11	福留 勇(昭和大 医)	昭和大 医
工藤正四郎	例15	昭和37	6.15～16	染谷 四郎(公衛院)	公衛院
	17		11.15～16	辺野喜正夫(都衛研)	厚生年金会館
	例16	38	5.24～25	福見 秀雄(予研)	公衛院
	18		11.14～15	桑原 章吾(東邦大 医)	厚生年金会館

支部長	回	年	月日	総(例)会長	会場
柳沢 讓	例18	昭和40	6.18	木村 義民(日医大)	都市センター
	20		11.10～11	相沢 憲(日大 医)	私学会館
	例19	41	6.2～3	柴田 重孝(家畜衛試)	小金井公会堂
			21	11.10～11	山本 郁夫(伝研)
	例20	42	6.2～3	佐々木正五(慶大 医)	北里講堂
			22	11.16～17	広木 彦吉(日歯大)
清水 文彦	例21	昭和43	6.14～15	清水 伝一(東大 薬)	東大 理
	23		11.12～13	横田 健(山梨衛研)	山梨県民会館
	例22	44	6.13～14	大園 卓(山之内中研)	野口記念館
			24	11.12～13	土田 毅(順大 医)
	例23	45	6.25～26	岩原 繁雄(国衛試)	科学技術館
			25	11.11～12	中谷林太郎(公衛院)
大黒 勇	例24	昭和46	6.3～4	新井 正(千葉大腐研)	千葉大 医
	26		11.11～12	岩田 和夫(東大 医)	農協ビル
	27	47	7.20～21	三淵 一二(静薬大)	静岡県民会館
	28		10.30～31	柴田 重孝(家畜衛試)	農協ビル
	29	48	6.22～23	常松 之典(医科研)	山梨ホール
	30		11.14～15	近藤 勇(慈大)	慈大
近藤 勇	31	昭和49	7.5～6	安斎 博(北里大)	北里大衛生学部
	32		11.20～21	善養寺 浩(都衛研)	都市センターホール
	33	50	6.26～27	高添 一朗(東京歯大)	野口記念会館
	34		11.10～11	吉岡 守正(東京女子医大)	東京女子医大
	35	51	6.25～26	田所 一郎(横浜市大 医)	横浜教育文化センター
	36		11.18～19	黒川 正身(予研)	野口記念会館
吉岡 守正	37	昭和52	6.24～25	本間 遜(医科研)	農協ホール
	38		11.29～30	斎藤 和久(慶大 医)	野口記念会館
	39	53	6.15～16	山岸 三郎(千葉大 薬)	薬学会館
	40		11.9～10	木村 貞夫(帝京大 医)	帝京大臨床大講堂
	41	54	7.6～7	松井 清治(北里大)	神奈川県民ホール
	42		11.20～21	尾形 学(東大 農)	野口記念会館
中谷林太郎	43	昭和55	6.5～6	田中 信男(東大応微研)	エーザイホール
	44		11.27～28	小松 信彦(昭和大 医)	野口記念会館
	45	56	6.25～26	片山 有夫(城西歯大)	野口記念会館
	46		10.17～18	橋本達一郎(筑波大)	筑波大臨床講堂
	47	57	6.26	松橋 直(予研)	公衛院
	48		11.11～12	吉田 耕作(聖マリアンナ医大)	聖マリアンナ医大臨床講堂
合田 朗	50	昭和59	11.7～8	加藤 巖(千葉大 医)	野口記念会館
	51		6.19	五島瑳智子(東邦大 医)	こまばエミナース
	52	60	11.16～17	深沢 義村(山梨医大)	山梨県民文化ホール
	53		6.7	光岡 知足(東大 農)	野口記念会館
	54		11.21～22	神中 寛(防衛医大)	野口記念会館

支部長	回	年	月日	総(例)会長	会場
木村 貞夫	55	昭和61	6.2	吉川昌之介(医科研)	東邦生命ホール
	56		10.16～17	寺脇 良郎(信州大 医)	松本市中央公民館
	57	62	6.8	金井 興美(予研)	野口記念会館
	58		10.15～16	緒方 幸雄(杏林大 医)	野口記念会館
	59	63	6.4	黒坂 公生(慈大)	慈大
	60		11.15～16	秋山 武久(北里大 医)	神奈川県民ホール
徳永 徹	61	平成1	6.3	河西 信彦(昭和大 医)	昭和大上条講堂
	62		10.12～13	橋本 一(群馬大 医)	水上・ホテル聚落
	63	2	6.9	渡辺 武彦(日本歯大)	野口記念会館
	64		11.13～14	山口 英世(帝京大 医)	私学会館アルカディア市ヶ谷
	65	3	6.12～13	河野 恵(東薬大)	野口記念会館
	66		11.7～8	中野 昌康(自治医大)	地域医療研修センター
島村 忠勝	67	平成4	6.19～20	島村 忠勝(昭和大 医)	昭和大学上条講堂
	68		11.5～6	金ヶ崎士郎(医科研)	医科研講堂
	69	5	6.24～25	川上 正也(北里大 医)	グリーンホール相模大野
	70		11.5～6	故長田恭明(第一製薬)	長井記念館
	71	6	6.22～23	工藤 康雄(都衛研)	北とぴあ
	72		11.10～11	吉田 孝人(浜松医大)	遠鉄ホテルエンパイア
吉川昌之介	73	平成7	6.22～23	三瀬 勝利(国衛試)	予研
	74		10.26～27	新井 俊彦(明治薬大)	こまばエミナース
	75	8	6.27～28	澤井 哲夫(千葉大 薬)	千葉大学けやき会館
	76		11.13～14	内山 竹彦(東京女子医大)	東京女子医大弥生記念講堂
	77	9	6.26～27	奥田 克爾(東京歯科大)	アルカディア市ヶ谷
	78		10.30～31	竹田 多恵(小児医療センター)	横浜ロイヤルパーク
内山 竹彦	79	平成10	7.10～11	中江 太治(東海大 医)	いこいの村あしがら
	80		11.25～26	大 壽士(日本医大老人研)	スクワール麴町
	81	11	6.29～30	平松 啓一(順天堂大 医)	順天堂大学有山記念講堂
	82		11.18～19	林 英生(筑波大 基礎医)	サンレイク土浦
	83	12	11.20～21	渡邊 治雄(国立感染症研究所)	国立感染症研究所
	84		11.26～27	奥田 研爾(横浜市大 医)	神奈川県民ホール
85	14	11.21～22	笹川 千尋(医科研)	医科研講堂	
神谷 茂	86	平成15	10.30～31	神谷 茂(杏林大 医)	横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ
	87	16	11.5～6	井上 松久(北里大 医)	北里大薬学部コンベンションホール
	88	17	10.20～21	小出 幸夫(浜松医大)	アクティシティ浜松コンgresセンター
渡邊 治雄	89	平成18	11.16～17	池 康嘉(群馬大 医)	伊香保温泉・森秋旅館
	90	19	10.12～13	荒川 宜親(感染研 細菌第二)	国立感染症研究所戸山庁舎
	91		10.23～24	山本 友子(千葉大 院薬)	生命の森リゾート

日本細菌学会関東支部総会評議員名簿

(任期：平成18年1月1日～平成20年12月31日)

役 職	氏 名	所 属
活性化推進委員会	荒川 宜親	国立感染症研究所 細菌第二部
活性化推進委員会	石原 和幸	東京歯科大学 微生物学教室
学術集会委員会	遠藤美代子	東京都健康安全研究センター 微生物部
編集委員会	岡村 登	東京医科歯科大学医学部 保健衛生学科
活性化推進委員会	川本 進	千葉大学真菌医学研究センター 分子機能研究部門 機能形態分野
活性化推進委員会〈委員長〉	北里 英郎	北里大学医療衛生学部微生物学研究室
学術集会委員会	下地 善弘	農業技術研究機構 動物衛生研究所 免疫制御研究室
編集委員会	進士ひとみ	東京慈恵会医科大学医学部 微生物学講座第2
学術集会委員会〈委員長〉	関崎 勉	東京大学 農学生命科学研究科 食の安全センター
学術集会委員会	滝本 博明	北里大学理学部 学術集会委員会生体防御学講座
学術集会委員会	平井 義一	自治医科大学医学部 感染・免疫学講座細菌学部門
編集委員会〈委員長〉	槇村 浩一	帝京大学医真菌研究センター
編集委員	森田 耕司	杏林大学保健学部 会臨床微生物学教室
支部会長	渡邊 治雄	国立感染症研究所 細菌第一部

(50音順)

協賛会社名

ミヤリサン製薬(株)

第一三共(株)

(財)日本生物科学研究所

(株)薬研社

平成20年9月30日現在

第91回 日本細菌学会関東支部総会〈講演抄録集〉

発行日 平成20年10月1日

発行者 第91回日本細菌学会 関東支部総会事務局
〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学 大学院薬学研究院 微生物薬品化学研究室
TEL:043-290-2929
FAX:043-290-2929

制 作 Next COMPANY **Secand** 株式会社 セカンド
〒862-0950
熊本県熊本市水前寺4丁目39-11
TEL:096-382-7793
FAX:096-386-2025